

地球、生物、微生物、私

帰りたい家として自邸を設計することにした。まずは「私」を知ることから始めたい。幼い頃、私は生物園鑑をよく訪れていた。その絵を見ながら生き物の話をするのが好きだった。後から知ったが、私は園鑑を巡っているうちに、文字を読えたらしい。昆虫、鳥類、恐竜、魚類、哺乳類。様々な種類の生物園鑑をポロポロになるまで読んだ。そんな幼児期を過ごしたおかげが、今でもそれなりに生物の知識が残っているし、生物が今でも好きである。中学生になると、進級祝いで一眼を買って、友人のH君とそのお父さんのバードウォッチングに連れてもらっていた。河口湖や富士山の麓、箱根臨海公園など、今思い返すと色々な所へ連れて行ってもらったことを実感する。落葉した冬の大葉樹林のキビタキ、夕暮れ時スキ群生地のオオヨシキリ、湖畔を自在に飛びまわるヤマセミ。写真は少ししか残っていないが、光景は鮮明に残っている。

14歳から就職するまでの間、家で猫を飼っていた。低層マンションの2階、彼女は階段を上る足音で私を識別して、玄関までお出迎えをし、帰るやいなや、色々話をしてくれた。京都へ就職のため引越しして数日、彼女が夫へ飛立った。猫は飼いに死に目をさせないというのは本当だった。今では覚えて京都についてきたんだらうと勝手に読み替えている。

だからと言って私たちが他の生物を慮り、超グリーン住宅に躍起になる必要もない。私たちが等しく生物だからだ。生物やたちと育む関係性は、管理でなく自立、排除でなく共生でありたい。そして建築の姿勢は、破壊の上に成り立つ創造ではなく、読替えの先にある空間の共有でありたい。

対象地、冷泉通りについて
京都鴨川東に経路湖疎水を流し込む土水場と水力発電施設がある。位置エネルギーを利用したこの施設は、さながら滝のようで、真夏の京都にこの辺だけ水ぶきの音とひんやりした風が流れている。ここは冷泉通りの名前がついている。川端にはサクラ、アペリア、フジが育ち、ナミアゲハ、オオスカシバ、ツマグロヨウモンがはたまた、疎水上空にはアカアカネがわざわざ飛んできて、護岸周囲をオスのハクセキレイがさえずりながらパトロールしている。

光と風と地上の熱
CWは既存緑地との境界に設け、緑を屋内に視覚的に取り込みつつ、上層下層に排煙窓を設け、自然換気を図るほか、土中の微生物を層と一緒に屋内へ取り込むことも狙った。高窓は安定した天光光や反射光を日中のアンビエント照明とするため、階高を上げ、居住域よりも高めの位置に設けた。高窓や塔屋開口部の煙突効果も狙っている。高窓から入る直達日射は夏は拒んでそれ以外は抱き入りたい。屋内空間の前庭を確保するため必要となる開口部の分厚い外壁に断熱を設けると、D-300ほど。この通りにはぼさぼさ走る小道との間に古びた倉庫と生い茂る緑地があった。緑地にはムクゲやアザミが育っていて、オオスカシバが蜜を吸いに飛んでいた。その光景が美しく、この倉庫が撤去されたときに、この緑地を残しながら住宅を建てる計画に決めた。

地下熱と水利とカウンターウェイト
空調の空気で冷やす冷感よりも、洞窟のひんやりした放射冷却の方が、心地よかったりする。冷媒管を基礎立上り増設部に流し、これを計画した。光熱環境を整えた結果、弱軸方向に非常に不安定になったこの建物を安定させるため、重心を落としたい。そのため、地下躯体が欲しい。地下3m-2mの地盤温度は17度程度と推定できたため、深さ3mのピットを設け雨水貯留槽及び過水受水槽とし、地震荷重風荷重に対するカウンターウェイトとした。ろ過水は植栽の自動灌水や、気化熱奪取装置、中水としてトイレ洗浄に用いる。

猫と住む
猫のゴロゴロで人間の脳はオキシトシンを分泌させることがわかっており、自邸に招く理由は立つが、そんなことよりかわいいから飼いたい。猫は人間や犬とは違い群れをつくらない生物であり、協調より自由を求める。飼いたいのは人間の都合であり猫には知らないことだ。そんな彼らを顧みさせないため、2匹飼育し、屋外へ自由に出入りできるように出入口のドアに小屋を設けた。外出は猫のストレス緩和を促し、屋内の植物をかわらねならないようにする。猫は屋外、屋内緑化の自由度向上する。ノミは土間部分でストップしたいの壁と建具で空間を分離し、ノミ付きの猫がそれ以上侵入できないようにした。

室内の色彩計画は猫と人間の色彩感覚をズレを利用した。猫は赤を感じる視覚システムを持っていない。そこで、猫が使ってよい空間は青や黄色、猫の興味を引きたくない空間は赤色を用いた。

鳥の話の聴く
シジュウカラは囀るらしい。これは最近僕が知ったビジュアルニュースである。彼らは「ビーツビ」「ジジ」「ヒヒヒ」「ジャージャー」等の100以上の異なる鳴き声を持ち、それらは「警戒」「集まれ」「オカ」「ヘド」等を意味する。さらにシジュウカラのさえずりは単語の羅列ではなく、語順を内包した言語であることを鈴木は証明した。私はシジュウカラ語を学びたいので、シジュウカラを誘致するために、屋上に巣箱を設置した。住環境にも、シジュウカラの繁殖期間における採餌対象は虫であるため、庭の植物に寄り付く昆虫の異常繁殖を抑えることが期待できる。

虫を調停する
蚊やコバエはあまり家の中に入らない。猫にはその駆除を遊びとして実行してくれることを期待できるが、他の調停戦略として、食虫植物を育てたい。ムシトリミレは食虫植物らしからぬかわいい見た目をしている。彼らをフィルタリングするため、開口部周辺にムシトリミレを育てる。屋上庭園は蚊の発生が予想されるため、メダカ、ヤゴ、アカアカネ、ツバメのための環境を用意した。

動いている庭
この家には地上庭園と屋上庭園、2つの庭園がある。地上の庭園は既存敷地に自生していたものをそのまま設計とした。植物相を調べたところ、YYYYがあり、人間によって計画された庭から動き始めた様子が見え、自生した系としての庭を尊重し、編集は関与し程度。背面の建物は植物のバリエーションとなるようラングラーを意図した。隣隣の土地クサシを越え、オオスカシバの環境と香りを風にのせて屋内へ届けることを狙った。

発酵エコシステム
植物や糞と触れ合うと受動的に人間は細菌を受け取るが、能動的な細菌獲得の手段として日本には発酵という文化がある。食物生産は風景をくくる。自然を発酵のスターターとしてみる。クサシ、ロウバイ、カタチ、キノコは異なる性質をもつから、その葉に棲みつく細菌も異なる。たべない漬物として、樹根ごとのぬか床を育てて味わうことは、新しい庭とのつながり方だろう。

私、猫、鳥、虫、植物、細菌のどれもが居場所を発見できるような環境としての家を目指した。

屋上庭園は周辺植物の花季を考慮してロウバイを、オオスカシバの家のカタチ・キノコを、アカアカネのためのZZZを水鉢に計画した。

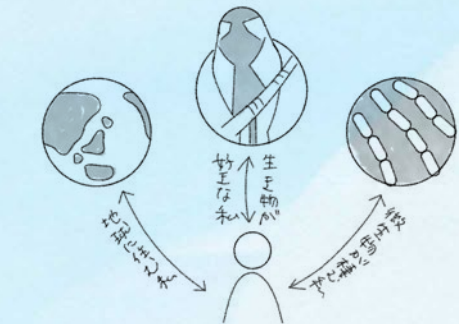


図1. 自邸を設計する私の三側面

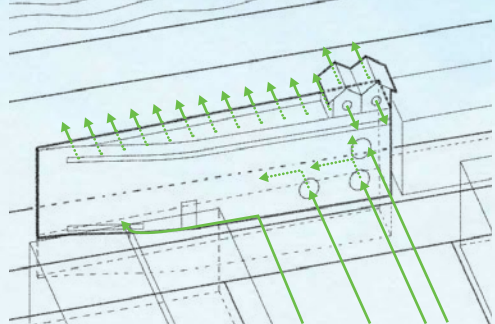


図2. 卓越風を受け止める

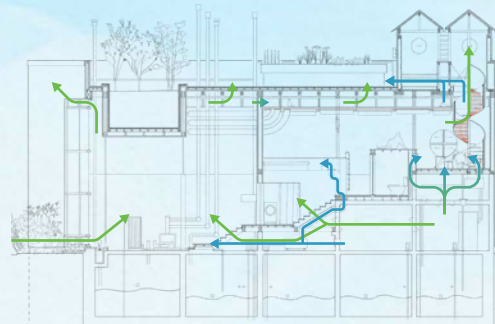


図3. 自然換気と機械式空調

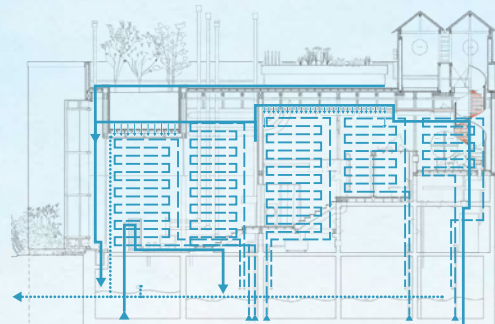


図4. 雨水利用

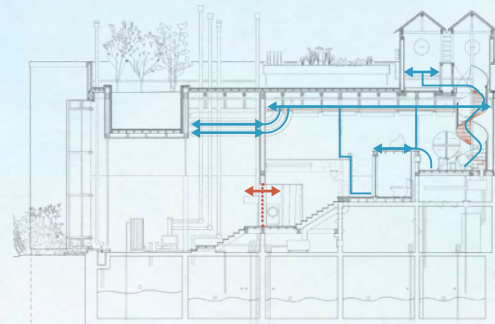


図5. 猫の行動可能範囲

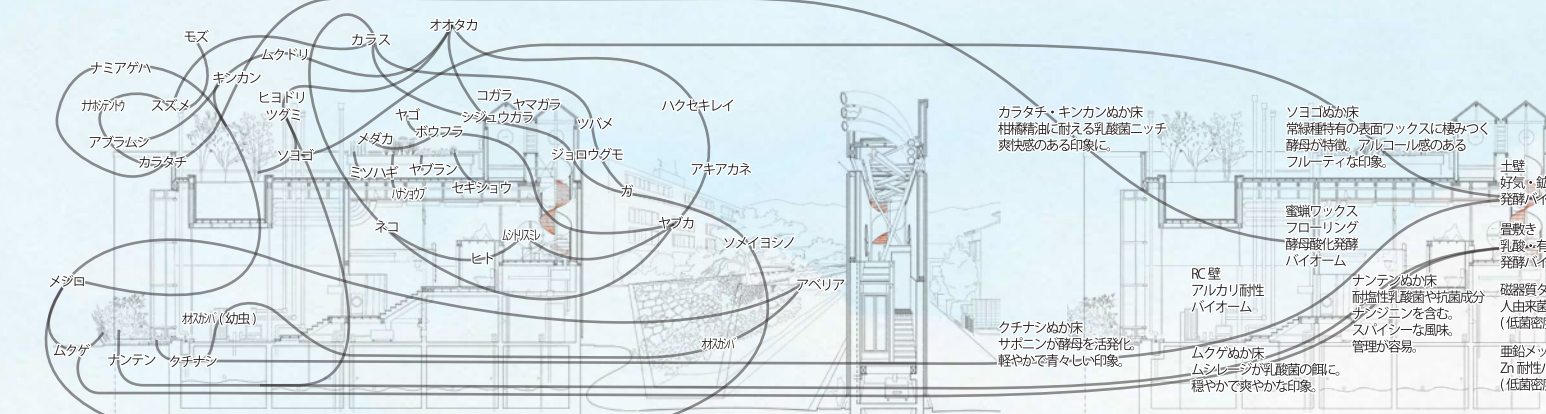
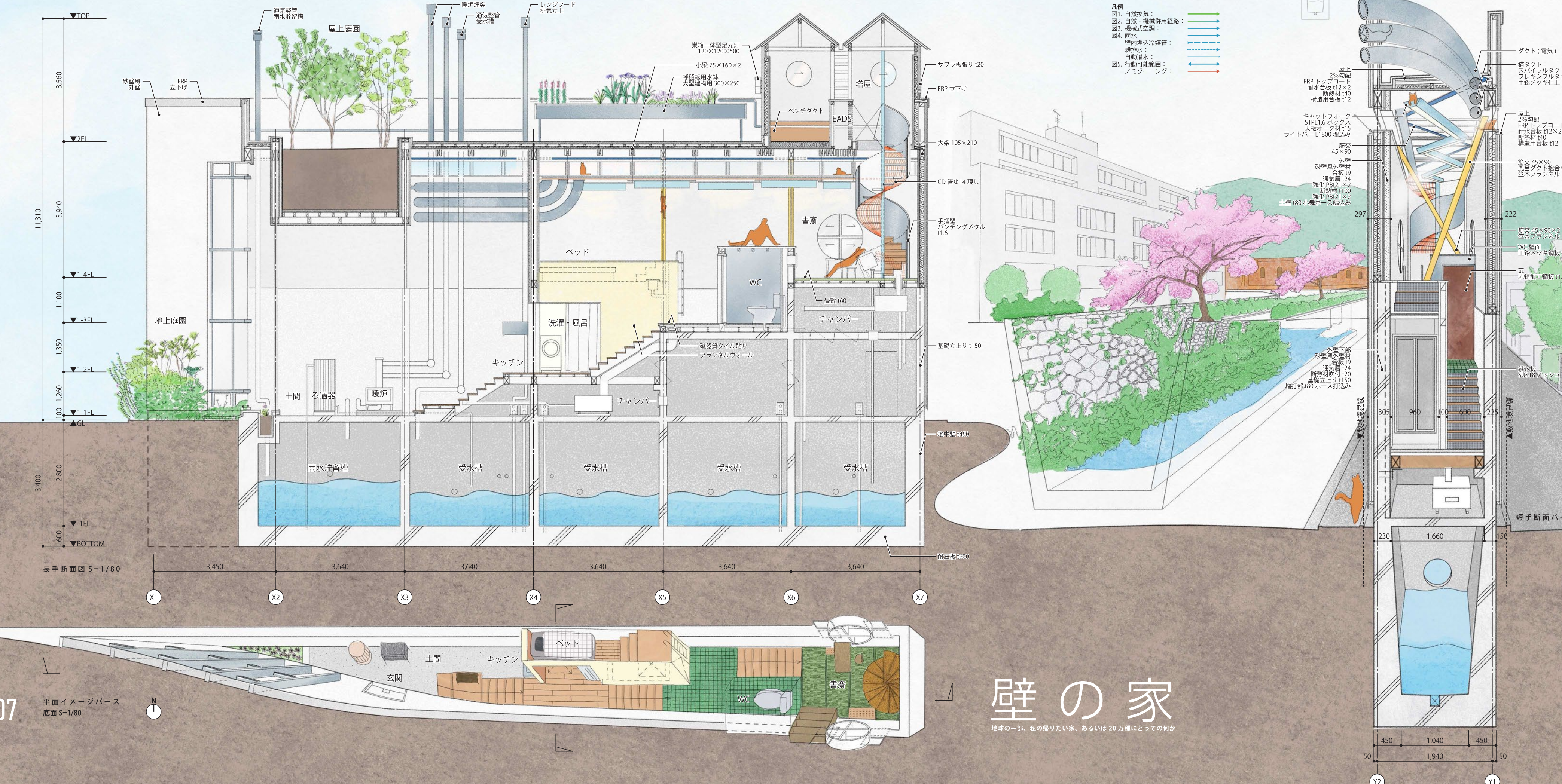


図6. 壁の家の生態系



壁の家

地球の一部、私の帰りたい家、あるいは20万種にとっての何か